

友人間ソーシャルサポート互惠性尺度の作成と妥当性の検討

Development of the Scale of Reciprocity in Social Support among Friends

浅野 更紗*・飯沼 和希**・大木 桃代***

Sarasa ASANO, Kazuki IINUMA, Momoyo OHKI

要旨：本研究は、一般的な友人間におけるソーシャルサポート互惠性を簡便に測定できる尺度の作成を目的とした。尺度の妥当性を検討するために、ネガティブな感情状態との関連を分析した。その結果、ソーシャルサポートが互惠状態にあるほど、ネガティブな感情が低いことが示された。尺度は、ソーシャルサポートの情緒的側面を重点的に測定できるものであり、従来の測定方法と比較するとより簡便にソーシャルサポートの互惠性とそれに対する認識が測定可能となっている。しかし、ソーシャルサポートの一側面に集中した尺度であることや、妥当性の検討が部分的であることから、今後さらなる改訂版の作成を行うことが課題としてあげられる。

キーワード：ソーシャルサポート, 互惠性, 友人, 社会的交換理論, 衡平理論

目 的

ソーシャルサポートは社会的支援とも言われ、心理的観点・社会的観点・福祉的観点など着目点によって様々な捉え方ができる多角的な概念である。心理的效果としては、ソーシャルサポートの受容によるストレスの軽減などが確認されている（岡安・嶋田・坂野, 1993）。他者からソーシャルサポートを受容することは、精神的・身体的健康を高める一要因であると言えよう。しかし、実際の社会生活において、人は他者と相互に影響を与えながら生活しており、ソーシャルサポートにおいても同様である。我々は、“サポートの受け手であると同時に送り手であり”（福岡, 1999）、ソーシャルサポートは一方向的に得られていけば良いというものではないと考えられる。従来は、サポートの一方通行の側面をみる研究が主流であったが、受容する側面だけでなく、提供と受容両面に関して検討する必要性が指摘され、提供と受容の双方から検討するものも多くみられるようになった（例えば Bunnk, Doosje, Jans, & Hopstaken, 1993；長谷川・下田, 2012；福岡・橋本, 1993）。その中で、ソーシャルサポートの提供と受容の量が同程度であ

* あさの さらさ 文教大学大学院人間科学研究科

** いいぬま かずき 文教大学大学院人間科学研究科

*** おおき ももよ 文教大学人間科学部

ることが心理的に良好な状態を保つために重要であると指摘されており、この提供と受容の量が同程度であることは、ソーシャルサポートの“互恵性”とされている。ソーシャルサポートの互恵性とは、サポートを自分から相手に与えている「提供量」と自分が相手から貰っている「受容量」が同程度にあることである（福岡・橋本，1997）。心理学的な観点からは、サポートを受容し相手にも提供することにより精神健康を良好に保つことができると言われており（周・深田，1996）、サポートが互恵的であることが心理的に良好な状態を保つためには必要であるといえる。

互恵性研究の中でも、Bunnk et al. (1993) や周・深田 (1996) は社会的交換理論をソーシャルサポートに援用して検討を行ってきた。特に、社会的交換理論の中でも、Adams (1965) やWalster, Walster, & Bersheid (1978) の提唱した衡平理論 (equity theory) を背景理論として用いている。衡平理論とは、2者間での一方の投入と成果の比率が、もう一方の投入と成果の比率と等しい場合が衡平であり、そうでない場合は不衡平状態となって不満などが生じるというものである。この衡平理論を元にソーシャルサポートの互恵性に関して論じると、個人が他者との間でソーシャルサポートの受容と提供が同程度であると感じていれば、ソーシャルサポートは互恵状態（衡平状態）であり、精神的に満足のいく対人関係を形成することができる。対人関係に対する満足は、対人関係上で生じるネガティブ感情の少なさによって評価される。Bunnk et al. (1993) や周・深田 (1996) の研究では、ソーシャルサポートが互恵的であると、ネガティブな感情が低下することが示されている。一方、互恵的でない状態は、受容が少なく提供が多い過小利得状態と、受容が多く提供が少ない過剰利得状態に分類される。過小利得状態にあると欲求不満感や負担感などの感情が増加し、過剰利得状態にあると羞恥心や負債感をなどの感情が増加するとされている（Buunk et al., 1993 ; La Gaipa, 1990 ; 周・深田, 1996）。

しかし、これらの研究ではソーシャルサポートの受容と提供それぞれの視点を取り入れて、互恵性に関して検討しているものの、そのソーシャルサポートの互恵性の測定方法が容易ではなく、また個人間のソーシャルサポートが互恵状態であることに関する認知を含んで測定できているとは言えない。ソーシャルサポートは、提供者が有用な援助として提供しても受容者の認知がそうでなければ、ソーシャルサポートとすることはできない。ソーシャルサポートの互恵性も同様に、ソーシャルサポート量が同程度であると認知されなければ、互恵的な状態であるとは言えないと考えられる。そのため、他者との相互的なソーシャルサポートに対する認知も含んだ測定を行うことで、ソーシャルサポートの互恵性測定尺度としての精細化が可能であると考えられる。

これらの論議を踏まえ、本研究では、ソーシャルサポートの互恵性をより簡便に測定するためのソーシャルサポート互恵性尺度の作成を目的とする。また、ソーシャルサポートに関しては友人関係と家族関係では受容するものも、提供するものも全く異なった様相を持つものである。量的な観点からもサポート分類の観点からも、家族からのサポートと友人からのサポートでは異なる特徴が得られている（例えば福岡・橋本，1997；福岡，2000）。そのため、本研究では友人関係に着目し、友人間のソーシャルサポート互恵性を測定する尺度の作成を試みる。

先行研究では、ソーシャルサポートを提供し合う相手を特定し研究を行うことで、互恵状態測定の精度が高まるという指摘もある（周・深田，1996）。しかし衡平理論を援用して行われてきた研究は親密な異性関係が主である。さらに、親密な人間関係においてはソーシャルサポートが互恵的であるかどうかは問題ではないという結果（Clark & Mills, 1979）や、社会的交換理論をモデルとした場合には、さほど親密ではない表面的な友人関係において互恵的であるほど友人

関係に対して満足感が得られるという結果（中村, 1990）が示されるなど、見解は一定ではない。これらを考慮した上で、本研究では、一般的な友人関係ではソーシャルサポートが互恵的であればネガティブな感情状態は低い状態にあると仮定し、友人関係全般のソーシャルサポートの互恵性に関する調査を行う。また、親密ではない友人を特定して質問することは困難であるなどの理由から、本研究では相手を特定せず友人関係全般として検討する。

本研究では、調査協力者本人のソーシャルサポート互恵性への認知を含めた、友人間ソーシャルサポートの互恵性を測定する尺度を作成し、妥当性の検討を行うことを目的とする。先行研究では、「ソーシャルサポートの互恵性が高い状態にあるとソーシャルサポートの互恵性が低い状態よりもネガティブな感情状態が低い」という結果が得られている（Bunnk et al., 1993；周・深田, 1996；内田・橋本, 2013）。本研究で作成した尺度を用いてそれらの先行研究と同様に、互恵状態であるほどネガティブな感情状態が低いという結果が得られれば、収束的妥当性が検証されたと言える。したがって、本研究の仮説を「ソーシャルサポートが互恵状態であるほどネガティブな感情状態は低い。」とし、これを検証する。

方 法

調査期間と調査協力者

調査は2015年の10月から11月に、大学生男子84名（平均年齢20.71歳, $SD=2.38$ ）、女性129名（平均年齢20.53歳, $SD=2.11$ ）、性別無記入2名、計215名（平均年齢20.61歳, $SD=1.72$ ）に質問紙調査を実施した。分析に際して、回答に不備が見られた者を除外した。除外後の対象者数は大学生男子74名（平均年齢20.74歳, $SD=2.48$ ）、女性117名（平均年齢20.54歳, $SD=2.19$ ）、性別無記入2名、計193名（平均年齢20.63歳, $SD=1.77$ ）であり、これを分析の対象とした。

手続き

調査にあたっては、本調査への参加は強制ではないこと、データは統計的に処理され、個人のデータのみが公表されることはないことを説明し、質問紙を配布した。なお、調査は匿名で行われることから、通常の同意文書の作成は不可能であり、回答することで調査への同意表明とみなされるものとした。

調査内容

(1) ソーシャルサポートの受容・提供・要求・被要求の測定

福岡・橋本（1997）によるソーシャルサポート12項目から福岡（2003）を参考に8項目とし、そこからさらに友人関係では考えられにくい金銭や看病に関する項目を削除した5項目であった。これらに対してそれぞれ1. 相手からどの程度してもらったか、2. 相手からどの程度してほしかったか、3. 自分が相手にどの程度したか、4. 自分が相手にどの程度してほしがられたか、の4つを5件法（1. 全くそうではない～5. たいへんそうである）で質問した。

(2) ソーシャルサポートの受容・提供のバランス（互恵性）に対する感情状態の測定

Lu & Argyle（1992）や周・深田（1996）を参考に、(1)と同様のソーシャルサポート5項目に関して、実際に相手からしてもらった程度と自分が相手に対してした程度の比較をしてもら

い、それに対して1. 恥ずかしさ, 2. 申し訳なさ, 3. 負担感, 4. 欲求不満感, の4つを感じる程度を5件法 (1. 全くそうではない~5. たいへんそうである) で質問した。

(3) ソーシャルサポートの互恵性の測定と感情状態の測定

福岡・橋本 (1997) によるソーシャルサポート項目などを元に新たに作成したソーシャルサポート互恵性尺度 (以下友人間 SS 互恵性尺度) 11 項目であった。互恵性に対する認知を測定できるよう「互いに~し合っている」などの表現となっていた。それに対し, 当てはまるかどうかを5件法 (1. 全くそうではない~5. たいへんそうである) で質問した。そして感情状態の測定として, 各項目に当てはまるかどうかを考えた際にどのような感情になるか, 1. 恥ずかしさ, 2. 申し訳なさ, 3. 負担感, 4. 欲求不満感, を5件法 (1. 全くそうではない~5. たいへんそうである) で質問した。

結 果

(1) ソーシャルサポートの受容・提供・要求・被要求と, 受容・提供のバランス (互恵性) に対する感情状態の差異の検討

従来の方法で測定されるソーシャルサポート互恵性がネガティブ感情に及ぼす影響を確認するため, 福岡 (1999) や周・深田 (1996) や山本・堀・石垣・大塚 (2007) を参考にした。

先行研究の方法通り, 受容と提供の差を互恵性として分析を行うために, 受容得点と提供得点の差を算出した。0 を互恵群とし, 0 より高値を過剰利得群, 0 未満を過小利得群とする3群に分類した。同様に, 周・深田 (1996) では, サポートを要求する量が他者と同程度であることが感情状態に影響すると考えられている。これに従い, 要求・被要求の互恵性に関する分析を行うため, 要求得点と被要求得点の差を算出した。0 を互恵群とし, 0 より高値を過剰要求群, 0 未満を過小要求群とする3群に分類した。

受容と提供のバランスによる各感情状態の差を検討するため, 受容・提供による分類群を独立変数, 受容・提供のバランスに対する感情状態を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果, 全ての項目において分類群の主効果は認められなかった。

同様に, 要求と被要求のバランスによる各感情状態の差を検討するため, 要求・被要求の分類を独立変数, 受容・提供のバランスに対する感情状態を従属変数とする1要因分散分析を行った。その結果, 全ての項目において分類群の主効果は認められなかった。

(2) 作成した尺度の因子構造の検討

作成した友人間 SS 互恵性尺度の因子構造を確認するため, 主因子法による因子分析を行った。因子負荷量 .40 に満たなかった項目を削除した結果, 6 項目1因子が抽出された (表1)。信頼性の検討のために α 係数を算出したところ, $\alpha = .80$ と高い内的整合性が認められた。

表1 友人間 SS 互恵性尺度因子分析結果 (主因子法)

I. 友人間 SS 互恵性尺度 ($\alpha = .80$)	
2. お互いに、落ち込んでいるときには慰め合っている	.77
3. お互いに、人間関係で悩んでいるときに相談し合っている	.70
6. 自分が悩んでいる事を人に相談したり、人から相談されたりする	.62
1. お互いに、悩んでいるとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして気をまぎれさせ合っている	.57
10. 人が自分に何かをくれたとき、今度は私もあげるようにしている	.56
8. もし人が自分に何かしてくれたら、今度は自分もするようになっている	.55
因子寄与率 40.37	

(3) 作成した尺度による感情状態の差異の検討

周・深田(1996)を参考に、感情状態の測定における「恥ずかしさ」得点と「申し訳なさ」得点の和を「負債感」得点とし、「負担感」得点と「欲求不満感」得点の和を「不服感」得点とした。次に、友人間 SS 互恵性尺度の項目の得点の総和を友人間 SS 互恵性尺度得点とし、調査協力者全体の平均得点を算出した(平均得点 22.99, $SD=4.23$)。調査協力者を平均得点によって 2 群に分類し、平均得点よりも高値の者を友人間 SS 互恵性高群 ($n=117$)、低値の者を友人間 SS 互恵性低群 ($n=76$) とした。互恵性の高さによる各感情状態得点の差を検討するため、各感情状態得点に関して友人間 SS 互恵性の高低による t 検定を行った。その結果、「恥ずかしさ」($t(191) = -3.45, p<.01$)、「負担感」($t(191) = -3.25, p<.01$)、「欲求不満感」($t(191) = -2.63, p<.05$)、「負債感」($t(191) = -2.40, p<.05$)、「不服感」($t(143.22) = -3.23, p<.01$)において、両群間に有意差が認められ、友人間 SS 互恵性低群よりも友人間 SS 互恵性高群のほうが高得点を示した(表 2)。

表 2 友人間 SS 互恵性尺度 2 群における感情状態得点の t 検定結果

	高群 ($n=117$)		低群 ($n=76$)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
恥ずかしさ	11.78	5.14	14.38	5.09	- 3.45 **
申し訳なさ	15.97	5.35	16.63	5.47	- .83
負担感	13.44	4.76	15.88	5.59	- 3.25 **
欲求不満感	10.56	4.52	12.38	5.00	- 2.63 *
負債感	27.75	8.98	31.01	9.63	- 2.40 *
不服感	23.99	8.17	28.26	9.48	- 3.23 **

* $p<.05$ ** $p<.01$

考 察

本研究では、一般的な友人間においてソーシャルサポートの互恵性がネガティブな感情状態に及ぼす影響を確認し、友人間のソーシャルサポートの互恵性を測定する尺度の作成を目的とした。そのため、福岡(1999)や周・深田(1996)、山本他(2007)による測定方法での互恵性の感情状態への影響を確認したのち、本研究で作成した尺度の構造と、作成した尺度で得られた互恵性と感情状態の関連の考察を通じて妥当性に言及する。

(1) ソーシャルサポートの受容・提供・要求・被要求と、受容・提供のバランス（互恵性）に対する感情状態の差異の検討

本研究では、ソーシャルサポートと福岡（1999）や周・深田（1996）、山本他（2007）などの先行研究と同様の測定方法で測定した互恵性は感情状態と関連を示さなかった。したがって、従来の測定方法では、回答で得られる互恵性すなわち受容と提供の差を算出したものと、実際のソーシャルサポート互恵性との間では隔たりがあると考えられる。単に提供と受容の程度を算出し比較した場合、ソーシャルサポートの受容と提供の“認識”を無視することとなる。ソーシャルサポートの提供得点と受容得点は、対象者が両者を比較することなく独立に回答したものである。ソーシャルサポートの互恵性とは、提供と受容の両者を比較して本人が互恵的であると認識する状態であると言える。提供と受容を比較して同程度の量と判断するような認識的側面を含めて、ソーシャルサポートの互恵性を測定するためには、単に受容量と提供量の差を算出し比較するだけでは「互いにソーシャルサポートを提供し合っている」という認識を測定することは困難であった可能性がある。そのために、本研究において従来の測定方法による互恵性が高い者はネガティブ感情が低い状態にあるという結果が得られなかったと考えられる。

また、サンプリングの問題も挙げられる。今回先行研究と同様の測定方法では互恵性と感情状態において有意な結果が得られなかったように、サンプリングの違いによって異なる認識の様相をもつ集団を対象とすることになるため、同様の結果が得られない可能性が考えられる。すなわち、従来の互恵性の測定方法は、特定の認識を持つ集団における互恵性を測定可能な手法であると推測される。これらを踏まえると、従来の測定方法は、ソーシャルサポートの互恵性を測定する方法としては、十分ではない可能性が示唆された。

(2) 作成した尺度の因子構造の検討

上述のように、先行研究のソーシャルサポートの互恵性測定方法では、調査協力者が提供と受容に対して互恵的であるか否かに関する「本人の認識」を適切に測定できているとは言いがたい。一方、本研究によって作成された友人間 SS 互恵性尺度では、「互いに、そのようにし合っている」という表現の項目にすることによって、ソーシャルサポートの受容と提供を他者と送り合っているという本人の認識を含めて測定することができるように配慮した。ソーシャルサポートなどの社会的に交換される資源においては、サポートの実際の授受だけではなく、サポート授受の認知もまた、サポートによる感情状態の変化やサポートへの満足度などに影響を及ぼす重要な側面である。そのため、実際に相互にサポートを提供している状態にある事実と、本人のサポート授受の状態に対する認識を含めて検討することが、より詳細なソーシャルサポートの互恵性研究として必要であると言える。このことから、互恵性測定の手法としては本研究で作成した友人間 SS 互恵性尺度の方が、より互恵性を測定するものとして適切であることが示唆される。また、本研究で作成した友人間 SS 互恵性尺度の項目を見ると、ソーシャルサポートにおける情緒的側面に着目した項目となっている。ソーシャルサポートの分類としては、道具的側面や手段的側面などあるが、情緒的側面というソーシャルサポートにおいて重要な一面に関して測定することが可能であると言える。これより、本尺度で作成した項目の形態としては、ソーシャルサポートの互恵性を測定するものとして適当であると言える。

しかし、包括的な友人間ソーシャルサポートの互恵性を測定する尺度としては、それぞれの項目数の少なさや、ソーシャルサポートとして含めるべき側面が欠如している。この尺度ではソー

シャルサポートの情緒的側面のみを測定しており、手段的側面などの含めるべきサポートの種類が考えられることから、改訂版の作成が求められる。

(3) 作成した尺度による感情状態の差異の検討

本研究の結果から、友人間 SS 互惠性尺度で測定されたソーシャルサポート互惠性の高い群が低い群よりもネガティブな感情状態は低いという結果が得られた。つまりサポートの比率が同程度であると不満が生じないということになり、ネガティブ感情が低いということが示唆された。衡平理論を用いてこの結果を検討すると、自分と相手の投入のバランスが異なる場合は、非対称となり釣り合っていない状態となる。衡平でない状態に対する不満などが生じているために、その不満が恥ずかしさなどの感情となって表出されると考えられる。つまり、人は社会的な関係の中では、投入の比率を衡平に保とうとする欲求があり、それが満たされないことで不満などがネガティブ感情として現れる。反対に不満などのネガティブ感情が低い状態、すなわちより互惠的な状態にあることで、不満が低下し、ネガティブ感情も低下すると考えられる。

また本研究では、仮説として「互惠状態であるほどネガティブな感情状態が低い」と想定しており、これは支持された。しかし(1)で示したように、収束的妥当性の基準となる先行研究での測定方法による感情状態の検討が、先行研究と同様の結果を示さなかった。そのため、本研究における収束的妥当性の検討は十分であると言い切れない。したがって、ネガティブ感情に影響を与えるものとしてソーシャルサポートの互惠性を測定するという視点においては、ある程度の妥当性が検証されたと言える。

総 括

本研究は、友人間ソーシャルサポートの互惠性を簡便に測定できる尺度の作成を目的とした。福岡(1999)や周・深田(1996)、山本他(2007)などで用いられているソーシャルサポート互惠性の測定方法と比較すると、より簡便にソーシャルサポートの互惠性とそれに対する調査協力者本人の認識が測定可能な尺度となっており、内容としては、ソーシャルサポートの情緒的側面を重点的に測定できるものである。また、互惠状態であるほどネガティブな感情状態が低いということが示されたため、十分ではないものの、本研究の仮説によって想定された妥当性は検証がなされた。今後さらに改訂する必要があるが、従来の方法では測定しきれなかった認識の測定の問題が克服され、より詳細に互惠性が測定可能であることが示唆される尺度が作成されたと言える。

最後に本研究における問題点と今後の課題を示す。本研究はひとつの大学によるサンプルにすぎないため、本研究の結果は大学生における友人関係全般に該当する結果とすることはできない。今後は、より多くの大学での調査の実施が求められる。さらに、尺度の項目内容として手段的側面を含めるなど、よりソーシャルサポートに関して包括的な内容となる改訂版の作成を行うことが挙げられる。また、今回の結果では、ソーシャルサポートの互惠性の高低による感情状態の差異が示され、両者の間に関連があることが示唆された。しかし、この結果で示されたものは並列的な関連であり、因果関係は実証できていない。先行研究では、ソーシャルサポートの互惠性とネガティブな感情状態の間に因果関係があることも示されている(Bunnk et al., 1993; 周・深田, 1996; 内田・橋本, 2013)。以上を踏まえ、今後は因果関係の検討を行い、妥当性の検討を継続することも課題である。

注

周・深田（1996）では、ネガティブな感情状態の分析として負担感得点と欲求不満感得点の和を負担感得点（負担感＋欲求不満感）としているが、同じ表現を用いることによるわかりにくさを解消するため、本研究ではそれらの和を不服感得点と記すこととした。

引用文献

- Adams, J. S. (1965). Inequity in social exchange. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 2, New York: Academic Press. pp. 267-299.
- Bunnk, B. P., Doosje, B. J., Jans, L. G. J. M. & Hopstaken, L. E. M. (1993). Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 801-811.
- Clark, M. S., & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 12-24.
- 長谷川真穂・下田芳幸（2012）. 中学生における友人間のソーシャルサポートの互恵性と共感性およびストレス反応との関連について 富山大学人間発達科学部紀要, 6 (2), 211-220.
- 福岡欣治（1999）. 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手—知覚されたサポートと実際のサポート授受の観点から— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13 (1), 57-70.
- 福岡欣治（2000）. 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向：達成動機を媒介要因とした検討 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14 (3-2), 1-10.
- 福岡欣治（2003）. 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャル・サポートの影響. 対人社会心理学研究
- 福岡欣治・橋本宰（1993）. クラスタ分析によるサポート内容の分類とその効果 日本心理学会第57回大会発表論文集, 157.
- 福岡欣治・橋本宰（1997）. 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68 (5), 403-409.
- La Gaipa, J. J. (1990). The negative effects of informal support. In S. Duck & R. Silver (Eds.), *Personal relationships and social support*. Newbury Park, CA:Sage. pp.122-139.
- Lu, L., & Argyle, M. (1992). Receiving and giving support: Effects on relationships and well-being. *Counseling Psychology Quarterly*, 5, 123-133.
- 中村雅彦（1990）. 大学生の友人関係の発展過程に関する研究—関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討— 社会心理学研究, 5 (1), 29-41.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二（1993）. 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 周玉慧・深田博己（1996）. ソーシャルサポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究, 67 (1), 33-41.
- 内田若希・橋本公雄（2013）. 大学生のメンタルヘルスの改善・増強に有効な理論モデルの検討—社会的スキルとソーシャル・サポートの互恵性に着目して— 健康心理学研究, 26 (2), 83-94.
- Walster, E., Berscheid, E., & Walster, G. W., (1976). New directions in equity research. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, 9, New York: Academic Press. pp.1-42.
- 山本友美子・堀匡・石垣琢磨・大塚泰正（2007）. 大学生におけるソーシャルサポートの互恵性変化と抑うつとの関連—性別およびサポート機能別の検討— 広島大学心理学研究, 7, 245-253.